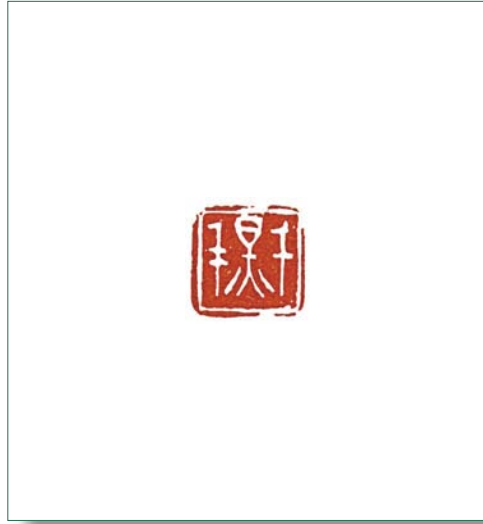


あそ

2

2010





千秋 保多孝三著『柞廬印存』(四) より

千秋は千年、長い年月、長寿の意がある。「一日千秋」などと使ふ。「秋」の元字がどの字なのか分からなかった。

千秋の母金銀を祈るらん  
千秋へ一つの心開きけり

高屋 窓秋  
宇都宮滴水

あを

二 月



古 釘

本町三 佐藤喜孝

冬晴やすこし昔の防空壕  
葱の根に泥鰯の口が付いてゐる  
家中に忘れものあり冬至粥  
仰向きの大地日を吸ひ雪を吸ひ  
古釘をさがしに出づる春の道

注連を張る神宮股立ち高くとり  
すす逃げを独りごちして怠けをり  
受けながすことを覚えて年送る  
どの店も声はり上げて師走かな  
大口をあけてシシヤモの連吊られ

逗 子 鎌倉喜久恵

十二月八日

川崎・小田栄

木村茂登子

金星のまたたきことに成道会  
総持寺の黄不動現ず大いてふ  
犬小屋に犬のぬまま冬に入る  
雲仙の霧氷の記憶キンコンカン  
元旦の計に少しの悪だくみ

晴天や今日は夫の布団干す  
温もりを包んで畳む干布団  
ビル影の合間を縫ふて布団干す  
プレゼント着てくれる子や冬ぬくし  
とにかくに電話の多し年の暮

白  
金  
齊藤裕子

谷 根 千

京 橋 篠 田 純 子

歳晩の砂利踏みしめる根津神社  
冬空の青さを分かつ蜘蛛の糸  
木造の三階建の冬日影  
日短大名屋敷腹時計  
権現の朱塗のやしろ冬桜

冬蜂の涙ぬぐへる仕草して  
冬ばらの白でありしが朱の蕾  
落葉掃き猫と話の出来る人  
ロボットもをどる世となり十二月  
カステラの粗目噛み当て冬日向

千 駄 木 芝 尚 子

宝仙寺前  
芝宮須磨子

掛時計遅れたままの十二月  
数へ日やまついいかなとおっしやって  
枯葎記憶で辿る越し方を  
数へ日やあれもこれもがそのままに  
榎山節考吟じていたり納吟会

### 西ゆく船

破裂しさうよ仏壇に熟柿置き  
しぐれけり西ゆく船も北さすも  
茎漬の累代の石てらてらす  
虎落笛百葉箱は扉をよろふ  
霊柩車行きたり枯れ野荘厳す

つるぎちひたして  
匆地東出

定梶じよう

谷根千界限

所 沢 須賀敏子

冬麗谷中一隅江戸時計  
根津に買ふポインセチアの赤深し  
冬日浴び千駄木の坂猫歩む  
家宣の胞衣塚のあり冬桜  
サボテンの曲り気になる冬ぬくし

切山椒作る店なし酉の市  
伝馬船往き交ふ波間百合鷗  
砂浜に屯すサーファー冬の鳶  
雪の屋根朴葉味噌の香満ちてをり  
勝馬の息しろじろと落着かず

本町三丁目 鈴木多枝子



渋柿

竜の玉洗濯槽に浮き上がる  
葉牡丹の葉とも花とも知れぬ憂さ  
取つときのワインの封を切る夜長  
干柿の朱のうすれゆく漱石忌  
渋柿を物干竿に吊しけり

浦和  
竹内弘子

花の種

長き夜のペンとどこほる悔み状  
楷は葉を垂れ聖堂は冬の雨  
花の種もらふ銀行年つまる  
小春日のぶらぶら歩く上野かな  
来年は何ある年か日記買ふ

田端  
田中藤穂

根津吟行

吟行の途次墓参

寒泉のたっぷり黄泉に届けむと  
裾模様さながら堀の黄葉かな  
黄落や千本鳥居行止  
冬うらら藪下古道三毛走る  
烏瓜おつむ天天光りをり

三光坂東亜未

枯

木枯や膳あたたまる物ばかり  
木枯につぶされさうな背まるめ  
木枯やピアノの音と協調し  
日の来たり金の冬蝶めまぐるし  
年の暮無性に話したき日なり

富田長崎桂子

枯芭蕉

大宮 早崎泰江

芭蕉枯るその枯れ振りのいさぎよさ  
竹林を突如賑はす寒雀  
余りにも空青きかな枯木立  
ストロブ列車鯛の匂ひなつかしき  
年の瀬や鴉見下ろす塵の山

十二月ロボット力士はつけよい  
十二月無線操縦土俵ふむ  
羽子板市売手は茶髪の黒絆天  
羽子板市ヨイ手締めの声高し  
冬うらら地震はひとごと根津界限

町屋 藤野寿子

水温む

河田町 堀内一郎

初景色 携帯電話 胸に挟み  
雪をんな白いマスクをして来る  
雪だるま倒れるまでは落ちつかず  
ほけてゆく吾れを見てゐる寒さかな  
俳句とは縦に書くもの水温む

年 始 め

中 井 森山のりこ

あるがまま 百才詩人 年始め  
幼児の声 透き通る 三ケ日  
リハビリも 心新たに 四日かな  
雑煮 椀夫の 椀にも 吸口を  
初大師おどけた顔の古達磨

レクイエム

落合森理和

レクイエム遙か雪嶺蔵の町  
坪庭に午後の日幽か藪柑子  
数へ日に親指で圧す落花生  
干し過ぎの白菜水の上らずに  
大掃除サッシの埃と椿象と

廃屋に一枚垂れし秋簾  
終りなきテロのニュースや花八手  
小春日や散歩に添ひてパン買うて  
茶の花や祖父の遺品の聴診器  
ニュース聞き地球儀に触る寒夜かな

東大宮山莊慶子

隼人瓜文殊菩薩のおほき耳  
山茶花や色鍋島焼の色の冴え  
喉から蹠も見せむ過雁かな  
金木犀の下枝に静かなる蝶々  
初時雨巡査の脇のなめくぢり

鍋屋横丁  
吉弘恭子

雪 國

晴渡る畝に残れる霜の粒  
寒雀一瞬集ふ大看板  
民宿街細き氷柱の連なれり  
駅師走酒売る人の赤き顔  
うづたかく雪乗せしまま宅配車

清瀬  
赤座典子

聖蹟桜ヶ丘  
安部 里子

のぼり坂下り坂ある大晦日  
冬至粥坂の途中の我家かな  
冬ぬくしカーブのきついいろは坂  
冬の夜子の授からぬ一人かな  
ゆつくりとあつまつて散る冬の雲

正 月

曳 舟 遠 藤 実

我が友も年一回の賀状かな  
ふるさとの正月静か古酒の酔  
女正月太りし猫の寄り添ひて  
落款の如き主にお正月  
添書に本意のありぬ賀状来し

## 一月作品より

吉弘恭子・佐藤喜孝

見上げれば星吞まれゆく冬満月

吉成美代子

夜の空を見ることが好きでいろいろ俳句をつくっている。この句を見たときに澄み切った冬の空の月の美しさが目に浮かぶ。夜空には季節に關係なく星が瞬いている。その星も都会では地上のあかりで見にくくなっているのが現状だ。

満月が少しずつ移動する度に近くの星が見えなくなる。星が月に吞まれていったようだ！こんな感覚で俳句が出来ることは本当に楽しい。

背の伸びて吃驚してるちゃんちゃんこ

東 亜 未

寒くなつて去年着ていたちゃんちゃんこを出して、子供に着せようとした。が着られなくなつていた。子供が大きくなつたことがどんなにか嬉しいことか。その時はそう思ったが、果たしてちゃんちゃんこは嬉しいのだろうか。そのあ

らわれが「吃驚」という固い言葉になった。どんなものにも心があるのだ。

松手入空がまばらに降りかかる

竹内弘子

句会に出された句で、このときも面白くて頂いた。植木職人が庭に入られたのか、ご自分で作業されたかは知らないが、松葉が伐りおとされて地上に落ちてゆく。松葉の落下を見ているうちにその間から空が目に入った。松葉が降ってきたのではなく、空が降ってきたと咄嗟に思われた。こういう思いは、俳句を作る上での根幹をなすことで大事にしたいと思った。

葉っぱ散りつくせり柿が重くなり

定梶じょう

五七五ときちつと区切りがない。句またがりしているところがこの句の面白さ。柿の葉がこの事によつて如実にばらばらと散っている様か思い起こせ



る。句またがりしたおかげで柿の葉がいきってきている。葉に隠れていた枝の撓りが目の前にあらわれたときの感動。俳句になることは前後左右何処にでもあることを改めて思い起こすことになった。

(以上恭子)

### 煤掃や天袋から付喪神

木村茂登子

付喪神は「つくもがみ」とよむ。私の知らない言葉であつた。以下は辞書その他による受け売り。  
器物が百年を経過するとそこに宿るとされる聖霊。人に害を加えるという。

「広辞苑」

“九十九”とも表記する。

「もつたいない」や「里山・鎮守の森」のように、九十九神や妖怪は自然保護を含めたものとして、日本はもとより世界に発信されるべき観念や価値観ともいえる。

「Wikipediaより抜粋」

掲句の付喪神は何に宿つてゐるのか。季語の

働きが少ないのが惜しい。

### 色の名を子に教へをり秋の暮

斉藤裕子

秋の暮、とあるから色の名も和名ではと勝手に想像する。日常会話の中で色名が話題に上る環境のよろしさを思つた。

### 分度器といふ晩秋を測るもの

定梶じょう

透明な半円形に細密な線が刻まれた分度器は機能美をそなへて美しいと思ふ私は変なのかも知れない。晩秋といふ見えないものを測るには真つ新たな分度器が相応しい。

### 思ひ出をかかへすぎたる冬帽子

田中藤穂

長い人生を振り返る時、このやうな感慨に耽ることだらう。さまざまな人の思ひ出が抱へきれないほど走馬灯のやうに切れ目無く浮ぶ。充実した人生の証でもあるが、思ひ出に押しつぶされるやうな気にもなつてくる。冬帽子そのものが思ひ出をかかへすぎたるとも読めるが、

象徴的な冬帽子として読んだ。

### 小春空仰ぎ見神田川のぞき

藤野寿子

中野を流れる神田川を散策したをりの句。自動車の通らぬ遊歩道が両岸にある。近隣の人も心豊かなのであらう。さまざまな植物が花や実を付けてゐて目を楽しませてくれた。神田川は水害対策のため、通常は深い底にわずかばかりの水量、鴨も立つてゐられる深さである。「仰ぎ」「のぞき」と注意を払つて歩いてゐる作者や仲間の様子が簡略、適確に描かれてゐる。いま、寿子さんは病床で戦はれてゐる。快癒を祈るばかりである。

### 下水管理まりて消えし石路の花

山莊慶子

道路工事のために穴を深く掘る。近隣にそのやうな事があると、工事の人が邪魔になるかも知れないが覗いてみたくなる。住んでゐる足元がどうなつてゐるか興味がある。佃島をたずね

た時も工事に巡りあつた。聞いてみると二層も掘らぬうちに水が出てくるそうだ。その穴の底にも水が溜まつてゐた。私の足元は赤土であるが、佃島は砂地であつた。何に使ふ訳ではないが、サンプルを少し貰つてきた。作者も下水管が地下に埋まり見えなくなる事に関心を示す。関心のない人には何で？とおもふかも知れないが、石路の花を含め面白く読んだ。句の材料はどこにもあると言ふことでもあるが、本当は句の材料は心中にあると言ふことである。

### 冬の薔薇枝を放せば花こぼれ

吉成美代子

「冬」がどれだけこの句に確かな言葉なのかは知らぬが、ほかの季節より元気がなささうだ。手元に引き寄せて花の匂ひを確かめたり愛でたりして、手を離れた。想像外のことには花びらがそのゆれで散つてしまつた。散るといふより「こぼれ」た。ただそれだけのことからであるが、作者の驚きは分かる。

(以上喜孝)

水霜や寫眞の裏の讀めない字	佐藤喜孝
此の頃はしんがりに慣れ落葉踏む	遠藤 実
渋滞も紅葉の中いろは坂	鎌倉喜久恵
煤掃や天袋から付喪神	木村茂登子
色の名を子に教へをり秋の暮	齊藤裕子
防空壕に時空混ざるや冬ぬくし	篠田純子
耐ふるとは背を正すこと龍の玉	芝 尚子
時雨降るアーケードの道家なき人	芝宮須磨子
分度器といふ晩秋を測るもの	定梶じょう
鶴の湯の白き湯溢る星月夜	須賀敏子
惜みなく木の実の落つる踏み歩く	鈴木多枝子
松手入空がまばらに降りかかる	竹内弘子
思ひ出をかかへすぎたる冬帽子	田中藤穂



前月作品

豊替翌朝蘭草の香に坐る	東 亜 未
落葉焚出来ぬ法律落葉掃く	長崎桂子
猫二匹恋ともならず日向ぼこ	早崎泰江
小春空仰ぎ見神田川のぞき	藤野寿子
毎日の遊びに馴れて鳴の水	堀内 一 郎
裏側より啄む小鳥熟れみかん	森 山 の り こ
母の部屋閉づる日多し白障子	森 理 和
下水管理まりて消えし石路の花	山 莊 慶 子
冬の薔薇枝を放せば花こぼれ	吉成美代子
初御空薄々のこる月ひとつ	吉弘恭子
鶴 鴿 や 鳴 交 し つ つ 川 下 る	赤座典子
神無月相談室のシャガール絵	安部里子

喜孝抄



# 近世俳諧と漢詩文 2 式拾八

王岩

寒食や鶏鳴ぬ宿もなしき 里東

里東、生没年未詳。元禄ゝ享保（一六八八年ゝ一七三六年）ごろ、芭蕉の門人である。里東の句は寒食の時節（仲春）を描いた。中国では清明節の前日（冬至より一〇五日目）を寒食節といつて、火気を断ち、冷たいものを食べる古俗があつた。春秋時代に晋の忠臣介子推が山で焼け死んだのを人々が憐れみ、その日に火を断つたのが寒食の起こりとされている。

二重否定の句法による里東「寒食や」の句は、『三体詩』と『唐詩選』に載る韓翃の七絶「寒食」に影響関係があるのではないかと考えている。

春城無処不飛花、  
春城処として飛花ならざるは無し

寒食東風御柳斜。  
寒食の東風に御柳斜めなり

日暮漢宮傳蠟燭、  
日暮れて漢宮より蠟燭を伝ふ

青煙散入五侯家。  
青煙は散じて五侯の家に入る

七絶「寒食」の起句は、二重否定の句法で、仲春の都中に花びらが飛び散っている風情を描いた。春風にそよぐ御柳（宮殿を囲む柳）は青々と美しい。柳という「植物」の描写を通して寒食の風景を詠んだ漢詩に対して、俳諧は鶏という「動物」を通して寒食の景色を捉えた。どこもかしこも鶏の鳴かぬ宿もないほど賑やかな仲春の生気を適切に伝えた佳句である。

里東が漢詩の句法を意識して詠んだ句だと考えられよう。



里 東

立ぎまや蚊屋もはづさぬ旅の宿

いつたきて露の葉にもるおぶくぞも

世の中や年貢島のけしの花

松陰や生船揚に江の月見

魚店や薙うち上て冬の月

粘になる蛸も夜のあつさかな

門砂やまきてしはすの洗ひ髪

「猿蓑」より

見知られて岩屋に足も留られず

それ世は泪雨としぐれと

配所を見廻ふ供御の蛤

たそがれは船幽霊の泣やらん

連も力も皆座頭なり

糊剛き夜着にちいさぎ御座敷て

夕辺の月に菜食嗅出す

看経の嗽にまぎるゝ咳気声

亀の甲烹らるゝ時は鳴もせず

唯牛糞に風のふく音

百姓の木綿仕まへば冬のきて

雪のやうなるかますごの塵

初花に雛の巻樽居ならべ

心のそこに恋ぞありける

「うやう」より

泥土

里東

泥土

珍碩

里東

泥土

怒誰

里東

乙州

珍碩

里東

乙州

珍碩

里東

鉄炮の遠音に曇る卯月哉

砂の小麦の瘦てはらく

女郎花心細気におそはれて

目の中おもく見遣がちなる

けふも又川原咄しをよく覚へ

一里こぞり山の下荳

怒誰

お降り之巻 両吟歌仙

メールにて

お降りや赤子の髪のふはふはと

首もすはりて見る初景色

半ば建つスカイツリーを近くにて

隅田の川に幾つもの橋

提灯の横に月出て障子舟

風に流るる鈴虫のこゑ

十五六秋をば憂しとおもはざり

残る蛩に頬照らさるる

縦繁の時絵の籠を枕元

母の愛でたる紫の房

長巻の家系図の処々朱墨あり

DNAを横書にする

どうやらかうやら夏を越したる合葉

蹲踞に入る月の涼しき

黒光る百年拭きし長廊下

揚げ幕出づる白き摺り足

判官の後を追ひゆく花の旅

春光の中化身してゐる

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

ふらここを高くたかくと漕ぎくらべ

西洋蒲公英ばかり目につく

埃及にふらりと行つてみたくなり

平山都夫の青い沙漠よ

宝石を砕き玄冬素雪の夜

寒の昴をよぎる流星

観音の臍の辺りのひねりやう

馬車に揺られてバガンの古塔

梯子かけ我待つ姫を奪はんと

出るに知られぬ籠の鳥です

雲切れて亀と見上ぐる池の月

かうべもたぐる南蛮煙管

長老の指図細かき秋祭

酒皸鼻の主はいつものところ

築地塀今宵は寄らず通り過ぎ

思ひ通りにゆかぬ金策

ふるさとの花見の宴に駈けつけて

うからやからにともがきの春

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗

不寝

竹洗



# あをかき集 堀内一郎選

(六人目以降五十音順)



定梶しよう

24

けふ愉快なれば強霜踏みによく  
捨てられて石白はあり石路の花  
勤勞をたつとぶ日にし一葉忌

行く方のありて船ゆく時雨かな  
日々霜の炭焼小屋は霜を置かず

十二月八日花屋に並ぶ人

赤座 典子

緩やかに山みづからの冬構  
丘陵が地平線のやう冬夕焼

年越はきざみ柚子乗すにしんそば  
爪の色新しくして年送る

鎌倉喜久恵

うかと咲きついでまれある返り花  
暮るる海雲引く空に冬の星  
冬の浜みな直立の夕鴉

空つ風新聞売りは石のせて  
暗闇坂消えて町名変りけり

檸檬食むすつばき人生かみしめて  
今頃は赤蕪うまし近江の国

早崎 泰江

山茶花の花びら掃くや限りなし

白露の夜人間臭を消しに入る

吉弘 恭子

切株を匿ふ千草のよりどころ

軒下のガランとなりし玄鳥帰

徳利に袴はなれぬ雪の夜

秋天やはふりあげたる雲ひとつ

絨緞の柄につまづき十二月

芝 尚子

花の頃知らず紫式部の実

手袋の片方が泣く冬日和

ふるさとはビル群となり年はゆく

竜の玉解けぬ心のわだかまり

シンビジウム花芽の数を楽しみり

寺あまた妙の字多し枇杷の花

夏蜜柑鈴生り根元に石蛙

迷ふのみ悟りもならず残り柿

短日や目覚装置台時計

辻褄をあはせて暮らす十二月

年の瀬や買はず終ひの宝籤

冬ざれや近況問はる長電話

母の味思ひつ刻む節料理

冬もみぢ戦前からの呉服店

冬日射る一代で閉つ呉服店

隣家に手筈残る十二月

臘梅を一枝添へてお重箱

花芒風になびかぬ意志秘めて

淋しさも連れて風邪をもらひけり

笹鳴の声の往来やすり硝子

紅の濃き化粧のままや木守柿

安息の一日天皇誕生日

藤野 寿子

森山のりこ

森 理和

遠藤 実

木村茂登子

五十肩肩まで沈め冬至風呂

ジングルベルしばしは活気づく商店街

嵩高に買ひかねてゐる歳の市

南無と言ひアーメンと言ひ去年今年

ひとつ蒲団ちひさき足に蹴られけり

朝寒しぎざぎざに眉描き上がる

シヨウウィンドウ破られてゐる十二月

あれからの月日を生きて又十二月

石路の花高層ビルの車寄せ

自転車に冬至南瓜が鎮座して

つとに聞くラジオ放送開戦を

臘梅や好奇心こそ余生なり

一日を富士と歩かん寒の晴

お茶の花今日在ることの不思議かな

戦とは殺すことなり返り花

山梔子を移し冬日を取り込めり

息しろじろ朝の漁師の急ぎ足

秋蝶を吹き上げてゐるビルの風

篠田 純子

芝宮須磨子

須賀 敏子

鈴木多枝子

紅い灯うつる巷は近し百合鷗

女中みな赤い前垂れ枯葉宿

勝山藩下屋敷跡冬椿

冬風の言問通墓を訪ふ

旧地名愛染町の冬の路地

穴八幡人の渦成す冬至かな

冬うらら戻りて老舗の雁擬

斗景土景土圭は時計冬至晴間

ザビエルの土産の時計冬時間

何色か決めかねてゐる冬董

小春日や脚榻の助けガラス拭く

小春日の畦道歩く安らかさ

年つまる自墮落少し交ぜ合す

田中 藤穂

東 亜 未

長崎 桂子

世塵の汚れを白露と言うフィルターに掛けて一掃するのである。秋九月、季の変わり目気分も一転する。自然とのつながりを大事に。

### 絨緞の柄につまつき十二月

尚子

ホテルのような広い平面を感じる。一色なら目を刺激せぬが模様によっては足止めもある。女性の繊細さに加え十二月の忙しさも感じさせる。

### けふ愉快なれば強霜踏みによく

じょう

勇気を持てば、どんな艱難辛苦も恐らくは無いと言う。上五のインパクトが第三者にも、やる気を起させる嬉しさがある。力強さに魅せられる。

### 十二月八日花屋に並ぶ人

典子

開戦の日、当日のラヂオ放送は耳に残っている。忘れ得ぬ灯である。知るか知らぬか花を求める女性群には、平和な日。

## 一句燦々

白露の夜人間臭を消しに入る

恭子

うかと咲きついでまねる返り花

喜久恵

予期せぬ遭難への警告である。何があるかわからぬ。この世の中作者も、そこらを感じたようだ。自然現象がそれとなく知らせる。

檸檬食むすっぱき人生かみしめて

泰江

日々好日であれば良いのだが、起伏の多い人生ではある。辛さを、歯を食いしばって人生行路、悲しからずや。

寺あまた妙の字多し枇杷の花

寿子

日蓮宗では必ず戒名に「妙」の一字が入るが寺名に各宗派にも多く見られる。辺りは妙の字で固められた寺町であり、枇杷の花の渋さが静けさを湛えている。

辻棲をあはせて暮らす十二月

のりこ

十二月は一年のけじめ、何がしら調整の月。貧富にかかわらずやりくりは求められる。暮らしに、いじましさ

を滲ませて泣かせる。

冬もみぢ戦前からの呉服店

理和

町に一軒は呉服屋があつて目を楽しませてくれたものだ。洋装に替って自然にさびれてとうとう店仕舞い、淋しい町に冬紅葉が昔の灯を残している。

笹鳴の声の往来やすり硝子

実

作者にはめずらしい写生句。庭と隔てる磨りガラスが笹鳴きに調和している。「声」は不要。

安息の一日天皇誕生日

茂登子

キリスト教の安息日ではなく、自身のやすらぎの一日が天皇誕生日と重なったのであろう。

あのラヂオから「皇太子殿下がお生まれになった」の歌が流れていた。少年お耳に。

南無と言ひアーメンといひ去年今年

純子

神佛のお蔭で一年無事に過ごせたという感謝の意であらうか、唱えて救われれば、これに越したことはない。信じることは良いこと、かけまくも俳句信じて去年今年。

あれからの月日を生きて又十二月 須磨子

上五あいまいだが、先程の開戦のことや、種々の思い出に辿りつくのである。あれからには作者ならずとも思い出の頁にインプットしてある。

臘梅や好奇心こそ余生なり 敏子

白梅の清楚とは異なり深み重みの黄色に惹かれる。好奇心とは希望であり勢いで、これが失われれば生きられぬ。余生ありと、言い切れる作者の立派なこと。

山梔子を移し冬日を取り込み 多枝子

縁側から植木の位置を替え日射を部屋の中へふくりましたのであらう。部屋中の諸々が作者と一緒に和やか

に歓声を挙げる。

女中みな赤い前垂れ枯葉宿 藤穂

女中というと卑下に聞えるが、仲居では弱くなる。女中で親しみが湧いてくるし純朴の姿も浮かぶ。赤と枯葉の配色も読者を温める。

穴八幡人の渦成す冬至かな 東亜未

立春大吉の御札を求めて近隣から参詣に、元来百姓の神様だから他県からも押し寄せる。

この斉藤神主が保護司の仲間度々会う。明治神宮に次いでお賽銭が上がるという賑わいぶりである。

何色か決めかねてゐる冬蕨 桂子

女性故、あれこれ迷っているのである。勿論衣類で冬蕨に和して冬温し。女性らしさがうかがえる。歳時記に「決めかねること一つあり冬すみれ 柵沢一郎」がある。

あをきーワード俳句辞典(か)

抱ふ

蛇苺鑑抱へて立つ少女

山莊 慶子

美容院鏡の中の金魚鉢

冬の鏡人につれなくして鬱に

吉成美代子  
木村茂登子

春暁や抱へる母の袋菓子

吉弘 恭子

屈む

代るがはる熱き児抱へ冬の坂

篠田 純子

屈まりて朝日にひろふ夏椿

関口 ゆき

春北風野暮用二つ三つ抱へ

後藤 志づ

ビル嵐大股に行く人屈む人

芝宮須磨子

冬瓜を抱へにこにこ知り顔が

佐藤 喜孝

御在所岳春竜胆に身を屈め

須賀 敏子

加賀

梅ひらく白加賀玉垣しだれとぞ

堀内 一郎

秋うらら反りて屈みて鍛へをり

山莊 慶子

手入れよき杉の際立つ加賀の夏

長崎 桂子

輝く

やはらかな訛と巡る冬の加賀

赤座 典子

密やかに輝くことも吾亦紅

早崎 泰江

煮含める加賀がんもどき浅き春

田中 藤穂

燦燦と輝く光合格す

西本 春水

鏡

頸のしわ映る秋暑の壁鏡

竹内 弘子

犬ふぐりおのれ輝くいろに咲き

渡邊 友七

幕間の懐中鏡秋の夜

松本 米子

ウロス島瞳輝く子ら裸足

須賀 敏子

枯葉舞ふ鏡かはりのショーウィンドウ

森 理和

垣

手套のままの手鏡泣きぼくろ

芝 尚子

縁先に盆柵みゆる垣隣

鎌倉喜久恵

鏡屋のガラス青青初しぐれ

田中 藤穂

東南の角の垣冬芽元氣

長崎 桂子

妻めめば鏡に秋の雨けぶる

渡邊 友七

猪口ほどに垣のあさがほ咲き終へし

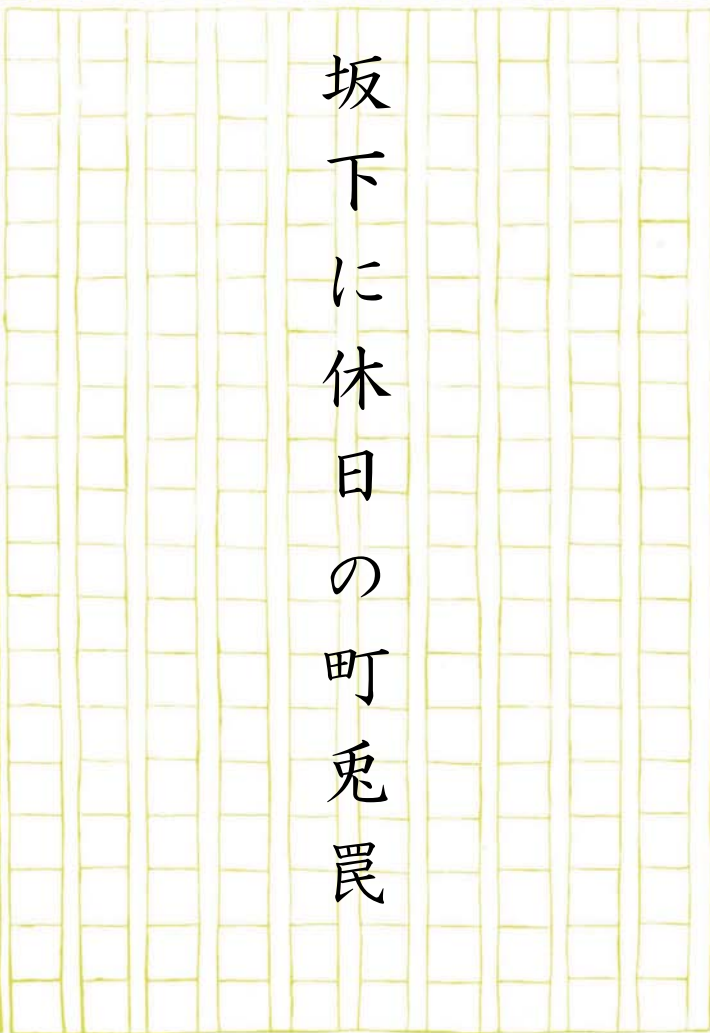
竹内 弘子

あを柳集

兼題  
坂

佐藤喜孝 選

坂  
下  
に  
休  
日  
の  
町  
兔  
毘



## 朝市は坂突き当たり耳袋

耳袋とはなつかしい。私の近辺では見掛けたことがない。『耳袋』といふ江戸期の随筆集がある。いつか読んでみたいと思つてゐる本だ。書くついでに調べたら岩波文庫にあるやうだ。坂は下り坂であらうか。登りであらうか、「突き当たり」が坂が終はつた所に市が立つてゐる様子があるか。耳袋をしてまで出掛ける朝市はさぞ新鮮かつおいしいもので賑はうて居ることであらう。「子はすぐにその地になじみ耳袋 柴田佐知子」「一对のものにいろいろ耳袋 鷹羽狩行」「根氣よく泣いてゐる子の耳袋 辻 直美」と耳袋は現代で創られてゐる。

## 坂下に休日町兔罌

「兔罌」を全く知らない。「針金の輪のみにあはれ兔罌 福田蓼汀」でおおよそを想像した。坂下は休日町、日曜日でもあらう。もちろん坂上も休日であるが……。それを見下ろす位置に立つ作者。屈託のある心持ちのやうだ。雪原のそこらに仕掛けられた兔罌か、これから仕掛けやうと手にしてゐるのであらうか。明暗の対比が気になる句であつた。





紅葉を上に見下にいろは坂

木村茂登子

冬日和言問通り谷中坂

藤野 寿子

返り花寺町急坂いたはりあふ

団子坂つるべ落しを惜しみけり

団子坂歳末工事足止めに

朝市は坂突き当たり耳袋

木履の緒赤くて七五三の坂

坂下に休日町兎罾

一の鳥居くぐりこれより木の芽坂

春の海がいよいよ高し一の坂

着膨れて文豪の町坂多し

坂の名の由来が楽し冬日和

煎餅焼く人の手覗く冬の坂

田中 藤穂

定梶じょう

長崎 桂子



暮れ早き三崎坂に千代紙屋

冬木立菊坂コロツケ昔の味

初富士は見へねど御坂峠晴

暗闇坂岩の壁から濃紺菊

行人坂羅漢の笑まふ冬日向

急坂の中途白息すれ違う

衣紋坂こして花咲く大門へ

枝垂梅膝をかばひし化粧坂

菊薫る野坂参三咳払ひ

団子坂藪下通り冬日燦

初雪や段だら坂のうへにたつ

孔舎衙坂越へる途中の秋の草

秋のくれ坂が小坂を産みおとす

東 亜 未

篠田 純子

吉弘 恭子

佐藤 喜孝



菊坂の廂間にありしぐれ空

冬枯の胸突坂を鳥歩く

春の犀檻内の坂のぼり下り

湯の宿の八方の坂消雪水

地下鐵が坂登りをり春めきて

白鳥發つ大空に坂あるごとく

流眊の坂本冬美花散らす

喪の家は坂の下なり繻の花

一の坂二の坂七坂金木犀

ぼるがへはやく下り坂春の雪

あを柳集 投句要項

二月末日〆切 句数自由

「光」

三月末日〆切 句数自由

「爪」

十二月の句会

傳

中野区 カフェ傳

養生は歩くことなり冬ぬくし  
 緩やかに山みづからの冬構  
 一日を富士と歩かん冬の晴  
 思はずも心底見するとき咳  
 鵜の嘴の光る勤勞感謝の日  
 犬小屋に主なきまま冬に入る  
 花の頃知らず紫式部の実  
 長き夜のペンとどこほる悔み状  
 残飯といふものなし火鉢かな  
 人の家の犬叱りつけ山茶花散る  
 ふと覚めて失き齒の疼く夜寒かな  
 潮騒の音聞きにゆく冬はじめ  
 見舞はれつ見舞ひつ年の迫りつつ  
 プレゼント着てみせる子や冬ぬくし  
 一二枚残る葉の揺る白障子  
 秋海棠に雨花言葉片思ひ

実 典 敏 弘 綾 茂 尚 藤 喜 恭 純 喜 寒 裕 理 寿  
 子 子 子 子 子 子 子 穂 孝 子 子 林 子 和 子

猫の哲学犬の哲学冬立てり  
 山茶花を背に長々と立ち話  
 望みには身の追ひつけず枇杷の花  
 風邪教師タテヨコ高さ立方体  
 立ち止まり綿虫ひとつ見送れり

喜 泰 慶 寿 綾  
 孝 江 子 子 子 子

岸町公民館

あを吟行会

谷根千界隈

裏木戸に山茶花の枝はさみ出づ  
 歳晩の砂利踏みしめる根津神社  
 冬うらら敷下古道三毛走る  
 ふところに電線の束大冬木  
 勝山落下屋敷跡冬椿  
 冷たさの這ひくる館江戸時計  
 根津に買ふポインセチアの赤深し  
 冷えし床印籠時計にひざまづき  
 画材店の四、五軒冬の根津通り  
 初氷錘しづかに江戸時計

零余子飯高島茂のみじかき指  
 大天狗鼻のつけ根を煤払  
 カステラの粗目噛み当て冬日和  
 抱擁を見下ろしてゐる寒鴉  
 仰向けの大地日を吸ひ雪を吸ひ  
 眼間に母現るる冬至粥  
 坪庭に午后の日幽か數柑子  
 南無と言ひアーメンといひ去年今年  
 来年は何ある年か日記買ふ  
 黄落や千本鳥居の行止り  
 掛時計遅れたままの十二月  
 侘みのその一輪になごむ日か  
 冬晴や迷路のやうな首都高速

恭 純 東 綾 藤 喜 喜 寒 尚 綾 恭  
 子 子 亜 子 穂 久 孝 林 子 子 子 子

七座句会  
 中野区・小川苑

連句勉強会 毎月第2日曜  
 希望者は左記まで  
 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜  
 カフェ傳 森 理和  
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜  
 岸町公民館 竹内弘子  
 (0488-86-3511)

あを吟行会  
 詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜  
 小川苑 吉弘恭子  
 (090-9839-3943)

あとがき

前号のあとがきで大間違えをした。あをかきの選を「十二月末締めきり投句は、佐藤喜孝が代選させていただきます。」と書いてしまった。間違えに気づき一応事なきを得たがどうも時間の観念が弱くていけない。ご迷惑をおかけしました。あをかき集は左記のように変更し再出発します。

- 1 編集部へ投句は従前通り。
  - 2 投句を作者名を外し選者へ選をお願いする。
  - 3 選者は数を限らず選をして、その鑑賞、評文を書く。
  - 4 他の句は編集部でまとめる。
  - 5 選者は半年交替とする。選者の選考は前任選者と佐藤喜孝が相談をして決める。
- ご協力よろしく願います。

ご厚志多謝

森 理和 様  
安部 里子 様  
東 亜 未 様

あを柳集（佐藤喜孝選） 投句要項

一月末日×切 句数自由

「返」

二月末日×切 句数自由

「光」

二〇一〇年二月号

発行日 二月八日

発行所 東京都中野区中央2,50,3

電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130-6-55526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。